

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0015  
東京都東大和市中央 1-539-15  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

# 東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2025年(令和7年)1月16日 木曜日

無料

## 第152号

毎月発行

発行 2025年(令和7年)1月16日 木曜日

### 【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

#### 【砂越 豊】

宮城県生まれ、71歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の上映会は延期。乗けて越奮文を日の大崎上は延。禍を向けて歴史のいえ新コナ。埋もれた東北文化研究。埋もれた東北を本を掘す。埋もれた東北を本を掘す。



## 2025年を【東北再興元年】としよう！

### 東北観転換、半導体産業、水産業、農業、観光業、温暖化、 すべてが『豊かで強い東北』に向かっている！

やはり新年号の最初の記事は景気の良い話にしようと思う。  
そこでいろいろ考えたのであるが、思い切って、今年の一〇二五年という年を「東北再興元年」と位置づけたいことにした。  
いくら年明けの景気づけの話題といつても、「ほら吹き」にもほどがあるのではないか、あるいは、あまりにも途方もない話に付き合わされるのは勘弁願いたいとお叱りを受けそうであるが、筆者は秘かにそうでもないと考えている。  
実はだれにも気づかれないことなく、おそらくは、東北人も東北関係者だって、いまはひとかけらも思ってもいないだろうが、深く静かに潜航しながらも、さまざまに分野から東北にエネルギーが着々と集結しているのを感じるのである。  
それをこの記事で「立証」していこうと思う。  
よく「潮目が変わる」という。それまでの流れが一変する前に、その流れが止ま

って、「逆流」のエネルギーを蓄える瞬間がある。  
その潮目がまさしく変化して、これまでの東北とは異なった姿に変貌していくための兆しというか、予兆というか、そうしたものの出現を予感させる動きを各分野に亘って眺めてみたいと思う。  
分野はそれこそ多岐にわたる。歴史の話、政治の話、経済の話、観光の話、温暖化の話などであるが、一見して「東北再興」とどういった関係があるのかといふか少しむかもしれないが、最後まで話を聞いて欲しい。  
また、これまで徹底的に植え付けられてきた「負け続けの東北」、「いつまでも辺境の地である東北」というイメージを一旦棚上げして、ニュートラルな視点から、以下の話に少し耳を傾けて欲しい。  
そして、もしでき得るならば、最後には「これらは十分ありうる話だ」と受け入れていただければさらに幸いである。

## 『負け続けの東北イメージ返上！』

### 豊かで強い東北を中央権力も恐れたのだ…これからは『豊かで強い東北』を旗印にしよう！

実は、歴代の中央権力に何度か、そして長い期間に亘って、支配されるのを嫌い、独立を目指して反抗を続けたのは我が東北であるが、そのことはほとんど話題になることはない。  
他方、何度も負けたこと、かつ、一度も勝たずに負け続けたことだけはみな知っている。  
そこから自虐的な東北観が育ち、中央からも事あるごとに押しつけられてきた。しかし、東北の反抗は実に千三百年もの歴史がある。それに対して同じく中央から離れていた九州の反抗は、かなり短かった。すぐに中央に取り込まれた。  
東北の最初の反抗は奈良時代で平安初期まで続いて

いて、百年近くも戦っており、最後に、日本で最も長い戦争である「三十八年戦争」も戦って、結果は破れたが、十万もの朝廷軍をアテルイらのゲリラ軍数千人で何度も撃退した。  
その戦争前のエミシの評判は「非常に勇壮で強い」だった。中央の権力者がエミシを傭兵として欲しがったのもここから来ている。  
だから、十万もの朝廷軍と戦えたのだし、何度も勝ったのだ。  
その後、平安中期の前九年・後三年の役の反抗があり、奥州藤原氏の台頭と「半独立」があり、大分下って、伊達政宗の天下統一の野望があった。  
江戸末期には戊辰戦争が

あって、新政府に対抗した。この東北という土地が反抗させるのか、東北人のDNAに独立と反抗の精神が埋め込まれて継承されているのか分らないが、とにかくすごいと言いたい方がない。  
なんというしつこさ、粘り強さ、あきらめない心、何とも表現のしようがない。こうした観点からあらためて見ると、東北は強いのであり、しかも戦い続けることができる富を産み出すのであり、だから中央から狙われたのだともいえる。  
富を産み出さない不毛の地を、大軍を派遣して攻めたりはしないのだ。  
また、千三百年の間、中央に富が奪われ続けたにもか

かわらず、奪われた直後から再び東北に何度も富が蓄積される。またそれを奪われるが、あきらめずに蓄える。  
もし中央から収奪されなければ、富はどんどん増えていくことになる。日本で最も豊かな地域になれる。  
こうしたアングルから、東北の歴史を見直すべきである。

ただ、東北人はそのことに気づいていない。まことにもつたいないことであるが、そうした流れを変えようではないか？  
すなわち、「豊かで強い東北」をもっと前面に押し出して、オール東北が強烈に意識すれば、流れは変わる。したがって、「東北再興」はけっして夢ではないのだ。



中央集権による最初の東北侵略(「東北地方の城柵」・・・『詳説日本史図録』より)

# 政治の変化…明治維新以来の西高東低が崩れてくる、そしてSNSで東日本が中心に、そのあと地方分権でさらに東北へ移動してくる

政治の世界でも、大きな変化が出現している。少し前までは、明治維新以来の「西高東低」の構造が盤石だった。すなわち、明治維新で出来上がった「長州藩閥政治」がこの国の政治をずっと牛耳って、その歴史はすでに百五十年もの長きに亘り、歴代首相を八人も出してきた。

しかし、どうみても、旧長州地域は人口は少ないし、狭いし、本州の西端に「政治



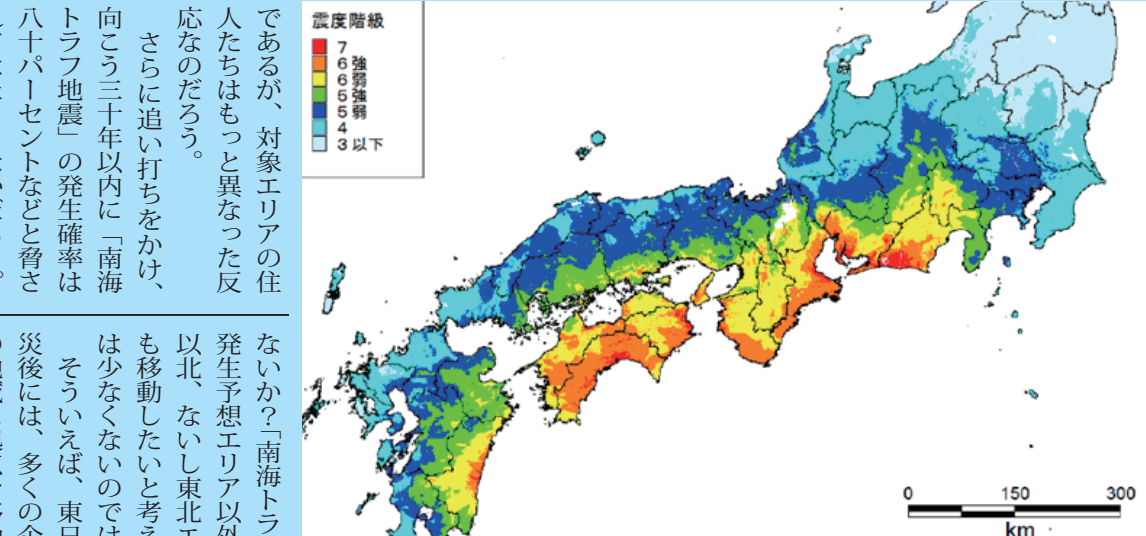
こんな狭い地域から歴代首相が8人も出たのは異常だね！(刀剣ワールドより拝借)

の中心」があるのはおかしい。強力な権力で、なりふり構わず支えていくしかない。ここに、政治と金の問題、政治と宗教の問題が出現してから、一挙にそのいびつな構造が瓦解しつつある。いまは長州閥という政治の中心が崩れて、どこが中心なのか判然としない混沌状態に突入している。

大集中する地域、つまり、大東京圏が圧倒的な政治の中心となる予感がある。加えて、全体が「西高東低」から「東高西低」にシフトして、可能性も大きくなった。これまでの、「政治の力」で、人口の少ない西の辺境に大学や病院その他の公共施設の密度が高かったが、それが東日本に移動してくるだろう。財源とともに。とはいえ、東京は満杯である。東京圏を一杯拡大しての関東圏でも吸収できない。もつとエリアを拡大しようとするとき、再び西側に行くだろうか？

## 次は経済①…南海トラフ騒ぎが引き起こす西側人口減で、東日本大震災での東北の低評価が逆転して、東北への企業進出活発化

最近特に頻繁に、大地震が発生すると何かとすぐ「南海トラフ地震」の話題に結びつけたがる。こんな状態になってから大分久しいのではあるが、昨年の能登半島地震発生からはさらに頻度が上昇し、よく耳にする。筆者は「南海トラフ地震」発生予想エリアには居住していないので、そうしたニュースが報じられても、せいぜい、またかと思う程度



南海トラフ地震で想定される震度や津波の高さ(気象庁より)

であるが、対象エリアの住人たちはもつと異なった反応なのだろう。さらに追い打ちをかけ、向こう三十年以内に「南海トラフ地震」の発生確率は八十パーセントなどと脅されてはたまらないだろう。言葉だけではなく、CG映像でリアルな災害場面が流されたら耐え難いだろう。事情が許せば、そこから逃げ出したくなる人も出てくるにちがいない。

先日、知人から聞いた話では、京都からの旅行客が本気で岩手県に移住したいと言ってきたという話もあるようで、他にもそうした人がたくさんいるだろうと予想できる。ならば、企業も同様では

ないか？「南海トラフ地震」発生予想エリア以外の関東以北、ないし東北エリアにも移動したいと考える企業は少なくないのではないかと。そういえば、東日本大震災後には、多くの企業が他の地域に拠点を移動していたのを思い出す。しかも福島第一原発の放射能汚染がその動きにさらに拍車をかけた。あれからすでに十四年も経過して、西側の人々からしたら、東北の災害リスクはすっかり消えたのかもしれない。したがって、関西地区や名古屋エリアの西側から、東北を含む関東以北への移動という動きが、これから起きてもおかしくない。

## 経済②…既存産業の東北進出もあり、半導体産業も、養殖等の新水産業も、米粉事業等の新農業も、観光事業もどんどん活性化



西澤潤一さんに聞く  
ミスター半導体の故西澤教授も見ているよ！(「宮城の新聞」より)

既存産業の東北進出 前述のような「南海トラフ地震」の影響で東北に拠点を移動しようという既存産業もあることだろうし、他には、最近世情が日本人に危険になってきた海外拠点を閉めて、国内に回帰しようという企業の新たな国内拠点を東北を選択する企業も現れることだろう。そのための土地は東北には探せばたくさんある。

労働人口問題があるが、他の地域からの移住を積極的にPRして確保することに努めれば、東北からの人口流出にも歯止めがかかるだろう。一挙両得である。半導体産業活発化 ここ最近の当新聞記事でも東北の半導体産業を何度か取り上げているように、この分野は東北にもともと強みがある。東北大学にはかつて「ミスター半導体」と呼ばれた故西澤潤一氏がいた。氏が築いた基礎とその伝統は今も継承されて、東北大学の半導体研究や開発は今も世界レベルである。生産拠点としては、熊本

のラピダスがあるが、何となく、大元の半導体研究では他地域は及ばない。加えて、今後ひっ迫するであろう半導体人材の育成には東北大学を中心とした東北ネットワークが重要な位置を占めるにちがいない。それは国内にとどまらず、世界にも人材を送り出すことになるだろう。特に有望な分野である。養殖等の新水産業 以前は東北水産業は高齢化と事業継承難で衰退するだろうと言われていたが、最近漁業を取り囲む環境が一変して、東北水産業に明るい展望が開けてきた。人間にとってタンパク質は不可欠な栄養素だが、牛



ノルウェーにおける最先端養殖技術 (水産振興オンラインより)

肉や豚肉のためのエサ栽培の農地不足、畜産由来の温暖化ガス規制の問題などで急速に「養殖魚」に注目され始めたという。この際、東北水産業はその主戦場を「養殖」に切り替えてはどうか?それとともに、株式会社化して、設備投資不足をカバーし、若手を引き入れて漁業近代化と漁業従事者の高収入路線に切り替えてはどうか?そうならば一挙両得どころではない効果が目に見えぬはずだ。

地は休耕地のまま。これを逆転するのが米粉産業だと考えている。高騰する小麦に代わる米、また、新たな米粉産業は東北がけん引できる事業である。**観光事業** 円安と超インフレで、日本に押し寄せる観光客が増している。他方、いまだに東北には海外からの観光客が来ない。しかし筆者は楽観視している。むしろオーバーツーリズムが心配だ。受入体制が整わない東北に収容しきれない観光客が押し寄せたら東北はどうなるか?観光収入激増は可能だ。



耕作放棄地のありさま (農業ジョブより)



オーバーツーリズム、北海道内拡大 高まる住民不満、事故の懸念 (北海道新聞より)

## 自然環境変化…温暖化で暑すぎる西日本、東京から東北へ移動し始める⇒それは新縄文時代の再来であり、人口分布が大変動する

全国地球温暖化防止活動推進センター(JCCCA)という機関が、二千年末の日本の地球温暖化の影響予測を行っている。まだあと七十五年もあるではないか、参考にならないと言わないで欲しい。地球環境の変化のサイクル時間は非常に長いのである。それで、我々のひ孫の時代と考えればよいのだ。その予測によれば、気温は今より3.5度から6.4度上昇するようだ。

海面は六十センチメートルから六十三センチメートル上昇する。洪水の被害額は今より三倍になり、熱中症による死者や救急搬送者数が二倍以上になると。  
\* すごい予測であるが、まづ気温。とても快適に住める環境ではなくなる。人口はどんどん北を目指す。寒い海外への移住も増えるだろう。東北にも移住者が増えるだろう。海面上昇と聞くと、縄文時代を思い起こす。縄文時代には今より海面が百二十メートルも高かったという説もある。それには及ばないが、それでも、海抜ゼロメートル地帯の人々は自動的に移住を余儀なくされる。その行先は東北などの山間部だろうか? また、熱中症のリスクを負ってまで、現在の場所に住み続けるものだろうか? こうした変化は急に発生するものではない。時間をかけて、七十五年後に「完成」するのである。これは、かつて、縄文時代の終わりに東北がミニ寒冷化の影響で、人口の南下、人口減少が起きた状況と真逆の動きを予想させる。縄文時代の人口分布は、圧倒的に東日本であり、東北にも人が多かった。その再現が訪れようとしていると考えられないか?

## 最後はやはりこの人…今シーズンは何をしでかしてくれるだろう?小さな夢の実現でとどまってはいけない!大谷選手に見習おう!

新年号の景気のいい記事の最後は、やはり、大谷選手に夢を託そう。従前から主張しているように、当新聞は『東北再興』のけん引役は大谷選手だと考えている。小さな夢に自分を閉じ込めず、世界に飛び出し、さらにひとつの前人未踏のエリアを開拓する。その開拓が終わったら、さらに次の高みを目指してどこまでもとどまることを



パパになった大谷選手は何を目指す? (full-Count より)



もうすぐパパになる (スポニチより)

知らない人物である。彼ならば、『東北再興』は十分に可能だと言うにちがいないと思う。そして、具体的な「設計図」を書いて、ひとつずつ着実に実行して行くことだろう。必要なのは、どこまでも信じていること。自分自身も、周囲も、「チーム」も、信じているのだ。明確な目標を立てて突き進んで行けば「必ず道は拓ける」と固く信じていることだ。彼の数々の偉業に比べれば、『東北再興』はまだたくさん可能性を秘めているだけ有利と考えられる。だから、けっして最初から無理だとあきらめたりせず、ぜひ大谷選手を見習って、突き進んでいこうではありませんか、ご同胞!



# 巳の年始めに我思うー 東北・眠れる湖の英雄の事

この冬もまた年越しの時節が来て、年明けて巳(蛇)年となった。商(殷)代の中国を起源とし、十干と十二支を組み合わせた、実際にはかなり複雑な六十を周期とするという数詞・干支であるが、日本人の誰もが知る十二の動物の設定の理由とはという諸説あつて不明との事である。それらの中には、あまり苦手という人がいないように思われる羊や兎、鳥といった動物もあれば、鼠や蛇、あるいは虎といった、正直多くの人に近寄り難いと思われる動物もいる。正直多くの人に近寄り難いと思われる動物もいる。正直多くの人に近寄り難いと思われる動物もいる。正直多くの人に近寄り難いと思われる動物もいる。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

もする。ちなみに私は、戌

年なのに猫好きで犬が苦手なのだが、仙台に住んでよりのこの地に「卦体神(けたいがみ・けでがみ)」という独特の風習があつて、各干支生まれの市民ら異なる市内の神々が守護する。この風習で、私は方角的にも戌亥に当たり当干支の人々を守護するという大崎八幡宮を意識し参拝するようになったのだ。この風習で言うと巳年の守護神は仙

※

例年、何かと所用で仙台の正月をろくに見聞できないでいたところ珍しく今年初売りに湧く市中を歩く機を得た私は、通常は軽くお辞儀をするだけで通り過ぎる金蛇水神社分霊社に、やはり巳年という事もあつたか鳥居をくぐりたくなくなった(自身今年の初詣と言えるかと思う)のだが、小さな分霊社ながら絶大と兼々伝え聞く商売繁盛の御利益を求めての、ここ商人の街

における人気は驚嘆すべきもので、鳥居前の列は途切れる事がなかった。金蛇水神社の存在を、私は仙台移住後に知ったのだが、蛇に纏わる神社として全国的に有名のようだ。竹駒神社(佐倍乃神社(笠島道祖神))など一方ならぬ靈験で知られた各社が会した名取地方の一角に鎮座する、創建年代不明の古社・金蛇水神社は山から平野に水が流れ込む地点に水神とその化身である蛇を祀る聖地として築かれ後に水の女神である弁財天も篤く信仰されるに至つたという。いや、山から水が流れ込む地点などは全国無数にあるのに、何故その地が、この絶大な靈験を持つ聖地となつたのか。その、根源的な疑問への答は容易に見つからない。本

当に、説明のつかない不思議や奇跡が、この地から起こつたのか、それとも他の明確な理由があるのか。ちなみに他にもここ宮城県内で蛇といえは仁和寺大権現こと二柱神社、やはり水神とされる瀬織津姫を祀る瀧澤神社、更にはこちらにも白蛇を化身とする弁財天を守護神に持つ黄金山神社など干支にちなんだ初詣先になるであろう神域は数多く思い浮かぶところだ。蛇という動物の外見や生態の奇怪さからその存在が遙かな古代から畏怖の対象となつてきた事は容易に想像できるが、神として崇拜する感覚というのは必ずし

も万人に即理解されるものではないかも知れない。蛇信仰について必ずと言ってよい程推測される、脱皮を繰り返す事から再生を、毒を持つ事から恐るべき力を男性器に似る事から旺盛なる精力をそれぞれ象徴されてきたという説だが、そうした蛇への眼差しは古来ある一方の派閥や勢力に偏つて存在していたような気がする。そう、縄文あるいは出雲という立場の人々。

今更書くまでもないような気もするが、出雲と言え日本先住の、つまり縄文時代以来の伝統を保つ古代政権であつたという見方が歴史研究の分野でも定着している感がある。縄文の場合特に中期初頭以降、特に中部から関東にかけて土器の装飾に蛇をモチーフにしたものが多くなるが、この場合信仰対象はマムシやアオダイショウで、信仰の理由として上記以外に農耕が盛んな土地で保管作物を害する鼠を捕食していた事にも関係していた説もある。

蛇信仰を含む縄文期以来の伝統が、出雲を中心とする古代国家体制にも引き継がれた可能性は高いだろう。ところが、蛇と日本列島の関係性に激震が起つた事を告げる歴史的記述がある。古事記、日本書紀にも記された日本神話素戔嗚尊が八岐大蛇を退治するというエピソードである。単なる、英雄による怪物

討伐にしか見えない人は暢気である。これは所謂天孫系、後の大和朝廷を建てる側の勢力が、出雲系の豪族を討ち滅ぼしたその図式そのものの可能性が高いからだ。そもそも、出雲系を見渡せば御使神を海蛇とする大国主、その正体を蛇神とする大物主、また蛇を「巳さん」と呼び崇める奈良・三輪山の大神神社と蛇信仰はあまりに根本的にして切り離せないものだ。

対して高天原の天孫系が蛇を忌み嫌み敵視した理由としては、敵勢力の信仰対象だつた事に天照大神を頂点とする統一国家形成に動物も含めた多神信仰が障害であつた事、また蛇を倒せる武器などが発達し畏敬する必要がなくなった事などが考えられるが、かと言つて彼らが列島の信仰から蛇を一掃できたかといえ

そう、蛇信仰は一掃されず、逆に雲系系の神社どころかほとんどの寺社にそのイメージを残した「龍神」という姿を取つてである。元々、インドの蛇神・ナガが仏教に取り入れられた中国古来の龍神信仰へ習合していった流れがあり、仏法守護の八部衆の一つ・八大龍王と「法華経」に説かれた。龍と蛇はその姿の類似性は元より、ともに水を

司るとされていた事もあり龍が日本に伝わると二つは重なり合つて、やがて国内ほとんどの寺社に龍の彫刻が見られる程に広まる。朝廷にしてみれば己の蛇神忌避性質をカモフラージュしつつ、蛇信仰を捨てようとなぬ大衆をそのまま取り込む事ができ、一方で元々が蛇信仰の神社の多くは政府や神社庁を慮つて龍神信仰に姿を変え、それでも一部はちやっかりと蛇神のままの信仰を黙認させてきたのではないだろうか。

しかしここで、他ならぬ東北における謎めいた、今も存続しているという蛇神関連の「奇祭」の話もしておかなければなるまい。秋田県男鹿市船越および潟上市天王、即ちかつての広大な湖・八郎潟周辺で毎年七月七日に開催されるという「蜘蛛舞・統人行事」がそれである。当祭事は、何故か前述の、素戔嗚尊が八岐大蛇を退治する、出雲地方での神話を題材としたものである。東北日本海側の奇祭と言え、我が郷土・鶴岡市の天神祭、通称「化けもの祭」(変装した「化けもの」達が人々に酒を振る舞つて歩く)も何故か遙か遠く京より九州へ流刑される菅原道真公の故事を元に江戸徳川時代に始まつたものだが、男鹿の統人行事は何と平安期起源で千年の歴史があるというのだ。

八岐大蛇退治場面の再現なのだが、そこがさすがは秋田というか、一風変わつている。本来は素戔嗚尊が大蛇に酒を飲ませ酔わせて倒すのであるが、当行事では素戔嗚尊自身が正体を無くす程に酩酊しており、何ででも演者を神社に二日間監禁して深酒を含めた儀式を経てトランス状態にするとの事で、黒牛に乗つて出撃という場面も四方から人々にやつとの事で支えてもらい全く英雄的なカッコよさはない。一方の「蜘蛛舞」は水面の舟上に建てられた松の木と柱の上で八岐大蛇役の演者が曲芸のような舞を演じるもので、題名からして「土蜘蛛」を連想し、参加者達も意識しているかどうかはともかく蝦夷関連の香りを醸し出している不思議な行事という他はない。そもそも当祭事の主催であり、素戔嗚尊を祀る東湖八坂神社はかの坂上田村麻呂による創建との事で、彼の時代度々蝦夷による叛乱が起きていた当地において朝廷による支配のイデオロギー定着の為、統人行事が導入されたのではないかと「あきた森づくり活動サポートセンター」ブログに推論が述べられている。



「広報かたがみ」より酩酊する素戔嗚尊

無論、沸き上がる疑問は相当ある。トランス状態とは聞こえはいいが酩酊などして大怪獣に勝つ気はあるのか、はともかく、地元の人々は一体、どちらの味方をするのか?否、そ

私も英雄を酔わせるのも、我が蛇神を倒させまいとする策謀ではないのか。よく知られるように八郎潟の守護神は八坂社の対岸にある八龍神社に祀られた八岐大蛇こと「八郎太郎」である。彼こそは、北東北に広がる「三湖伝説」の主人公だ。もとマタギの若者で、仲間と分けるべき獲物のイワナを一人で食べた因果で十和田湖の大蛇に変身その後熊野修験者・南祖坊と湖の覇権を巡つて戦うも南西へ敗走。当時島であつた男鹿と本土を繋ぎ持たせたのが八郎湖であつた。

か、出雲を追われた古代政権の人々が海伝いに東北、それも秋田に移り住んだという伝説が島根県に残ると秋田の郷土史家・伊藤郷人は言う。八郎太郎伝説は、出雲で抹殺された八岐大蛇の復活に外ならず、

私も一時、かつて八郎湖の大半を埋め立て尽くした戦後の大規模な干拓事業が八郎太郎八岐大蛇即ち出雲の象徴の息の根を止めんとする中央の陰謀だつたのではないかなどと勘繰つた事があつたが、実は既に八郎太郎は辰子姫との恋を成就させほとんど田沢湖に同居して久しく、その深い愛によつて田沢湖は日本一の深さとなり、逆に八郎湖は浅くなつていったのだという。今も毎年、退治されるという八岐大蛇とは一体誰なのか。実はそこに倒すべき敵など存在せず、だからこそ素戔嗚尊は、酒を飲み古代の夢に耽溺するのみなのではないのか。そんな風にも思いつたのである。

古代縄文から続く出雲として蝦夷を守護する蛇神の国。それが日本最深の湖を中心として息づいていると想像すれば、この一年がここ東北にとって特別な年になる気がしないでもない。

か、出雲を追われた古代政権の人々が海伝いに東北、それも秋田に移り住んだという伝説が島根県に残ると秋田の郷土史家・伊藤郷人は言う。八郎太郎伝説は、出雲で抹殺された八岐大蛇の復活に外ならず、



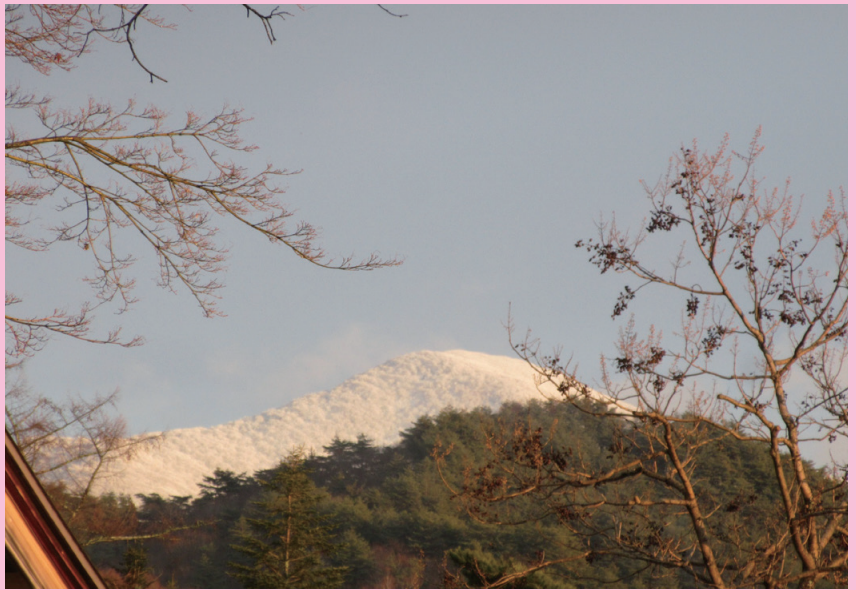
新年あけましておめでとうございます。



メガネ橋を渡るポケモントレイン



寒中の川霧



白い六角牛山



ウメモドキにツララ

シリーズ 遠野の自然  
**「遠野の小寒」**  
 遠野 1000 景より

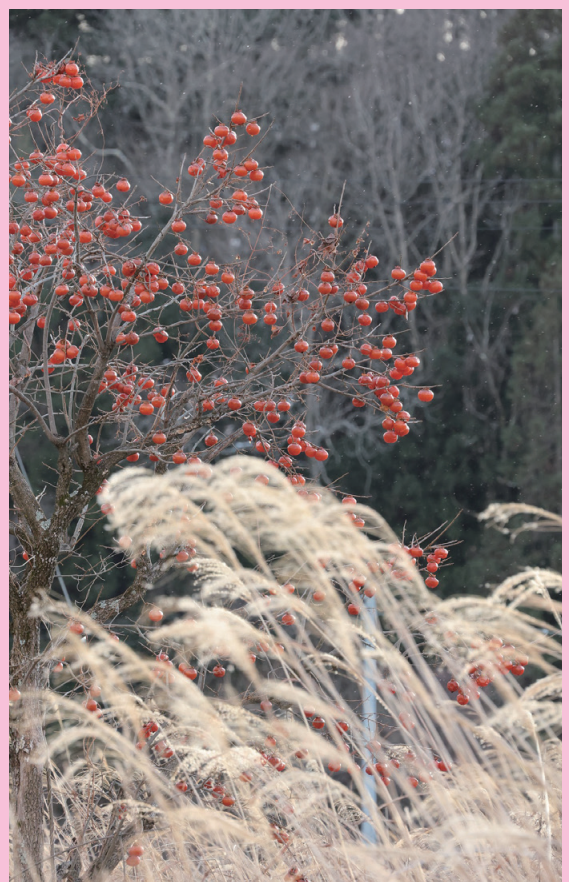
年が明けた日、昨年の能登半島のようなことがないようにと、心から祈った。  
 一月といえば、いまからちょうど三十年前に阪神淡路大震災があった。その後十四年前の東日本大震災があった。そして昨年の能登半島地震が続いた。  
 三つの大地震は十三から十四年おきに、発生していることになる。  
 もともと日本列島は大きな地震の集積地みたいなところではあるが、それにしても発生頻度が短くなっているように感じられ、とても落ち着かない。  
 そうしたこともあり、今年も列島全体が無事であることを祈らずにはおれなかった年明けだった。



霧氷 2



足跡



カキとススキ

# 発生から14年後にあらためて問う!東日本大震災という悲惨な経験はこの国全体で共有可能なのか?それとも共有されないままこの国の記憶から消滅してしまうのか?

## 大地震列島の日本

今年の元旦にもまたどこかで大地震が起きるのではないかとビクビクしていた。無事元旦を迎えることが出来たとほっとした矢先、この記事執筆中の十三日夜、宮崎県で大地震と津波が発生したとのニュースでまことに落ち着かない。昨年、まことに不幸にも、元旦の能登半島地震で年が明けた。あれから一年経っても、いまだにまともな生活に戻れていない能登半島の様子を見るたびに傷む。

東日本大震災を論じる際の当新聞の記事執筆のスタンスにずっと居心地の悪さを抱いてきたことがあって、それを突きつめてみたいと思っただけである。

同時にこの問題は長い間見過ごされてきたし、当新聞に限らず、大災害をみなで考えるというとき、非常に重要な意味を持つと考えられているから、徹底的に論じておくべく考えた。

そこでまず最初に、千差万別の大災害被災経験から『共通視点』を作り上げることは可能かという基本問題を考えてみよう。

当新聞で東日本大震災を取り上げる際のスタンスは、端的に言えば、発生時に被災地にいた被災経験者としてのスタンスではない。

また親族や友人・知人に犠牲者が出た訳でもない。一番の犠牲者を出した宮城県石巻市は生まれ故郷のすぐ近くであり、そのまちは高校は母校で、知人も多いという関係にすぎない。

そうした大震災とは薄い関係しかないのに、大段に東日本大震災を語る段になると、後ろめたい気分がつきまとうのだ。

また、東日本大震災が広く語られるとき、あまりにも広範囲な被災地があり、被災者それぞれの被災体験は千差万別であり、ひとつとして同じ経験はなく、したがってその被災の記憶も千差万別であり、類型化さえ拒んでいるというのに、

千差万別の被災経験からの共通視点は可能か

今回、あらためて巨大地震のことを取り上げるのは、

いったいどういう共通のスタンスが可能なのかと思いつつ悩んできたこともある。極論すれば、共通する視点が存在しない大災害経験というものは、それぞれの経験を語る以外には、一般論としては語ることはできないのではないかと考えた。

さらに進んで、千差万別の被災経験からの共通視点を見出すことも不可能なのではないか。

だから、個々人の経験を越えた視点は不可能なため、その不可能な状態のまま、この国の記憶からも消失してしまうのではないかと恐れてしまったのである。

## 鷺田氏の新聞コラム

そんな折、非常に心に突き刺さる日経新聞のコラムに出くわした。

それを読んで、これまでの考え方がまったくの方向違いであることが分かった。いわく、「一人ひとりの記憶をひとつにまとめない」、「子どもの悲惨な被災体験は身体的記憶というもので、後の別の大災害で追体験して、あらためて傷を負いなおす」、「希望の子どもという社会の期待で消耗する」、「記憶の風化」は被災地の外の人の思い、それも自身における記憶の薄れへの呵責の表現、どれもグサリと突き刺してくる。

これらの言葉で「千差万別」が「仕分け」られてくるにちがいない。

千差万別であり、類型化さえ拒んでいるというのに、

千差万別の被災経験からの共通視点は可能か

以下の「困み」は鷺田清一氏の「記憶の仕分け」からの抜粋である。氏は1949年京生まれ。哲学者であり、「せんだいメディアテーク館長」、「サントリー文化財団副理事長」 日経新聞 2025.1.12 より

一人ひとりの記憶を一つにまとめないこと。そのことの大切さに気づかされたのは、1995年と2011年の2つの大震災をめぐる、当時幼かった人たちの単純にまとめえない「記憶」にふれたことによる。

阪神・淡路大震災のとき、当時はまだ幼くて何が起きたのか分からぬまま家族を亡くし、家を失った阪神間の子供らが、その16年後、東日本大震災の地震や津波の映像を目の当たりにし、パニックになったという話を人づてに聞いた。・・・人には、思い出すことはないのに忘れていないことがある。身体の記憶ともいえるべきもの。95年にじぶんがどんな出来事を経験したのか理解できなかった子供らが、今はじめて、というかあらためて傷を負いなおしていると。

2011年に東北で激震を経験した子らもまた、いま別のかたちで当時の経験を反芻している。震災で生き残った子どもたちは、作家・くどうれいんによれば、その後『希望の子ども』としての役割を多少なりとも背負わなくちゃいけなかった。」そしてそういうふう「社会の期待」に気持ちを沿わせているうち、ひどく消耗していたことに気づき、大人になっていまそのことを反芻しだしている。

1・17、3・11と「記念日」が近づくと、「記憶の風化」ということが符牒を合わせたかのように語りだされる。けれども「記憶の風化」などということは断じてない。家族、友人、職場、故郷・・・。絶対に代わりのきかないものを失った人にとって喪失の記憶は終生消えようがないし、また震災後に生まれた人にとってはそもそも記憶がないのだから風化もありえない。「記憶の風化」は被災地の外の人の思い、それも自身における記憶の薄れへの呵責の表現でしかないとおもう。



写真でお伝えする **東北の風景**  
**『東北の真冬』**

写真撮影 尾崎匠

